

## 野澤先生を送る——野澤先生と私の交流小史

新井 敬夫

いつも柔和な表情をしておられた。先生から見ればまだ若輩者の私が言うのも僭越だが、ご容赦いただきたい。野澤先生と10年以上、年下の同僚として教育、研究、そして学部運営をさせてもらった総体的な印象である。総体的、という表現には、時々見せる研究者としての真摯で鋭い表情も含まれる。先生の公的なプロフィール・業績は別のページに譲り、そんな個人的印象と個人的体験を思い出しつつ先生への惜別の言葉としたい。

平成9年の秋、私は、国際関係学部教員採用の審査員の一人（すでに10年以上経過しているので名前を出すことは時効であろう）として、応募者の著書、論文を読んでいた。野澤勝美の著作をきちんと読むのはこの時が初めてだったと思う。数週間後、今度は採用面接でお会いした。研究者として、そして研究者をまとめる管理者としての典型的イメージはなかった。あくまでも、柔和でおだやかな紳士であった。私は、フィリピンの農業について質問した。フィリピンの一般農家の生産物と購入物（農業投入財や消費財）の価格比、つまり出荷と購入の農家交易条件の変化がどうであったか、を聞いた（つもりだった）が、正しく伝わったか否か、今もってわからない。私も緊張していた。後日、野澤先生は「新井先生には、農家の生産物の庭先価格のことを聞かれた」とおっしゃっていた。採用審査員である私のほうが、採用候補者の野澤先生よりも、よほどあがっていたのだ。私には、正鵠を射た意見を言えるほどの見識はなかったが、会議で野澤先生の採用が決まった。

翌春、歓迎パーティーで、学部教員そろって先生をお迎えすることとなった。市ヶ谷のアジア経済研究所でフィリピンの地域研究、特に政治経済を

専門とされていた先生は、フィリピンのことを誇らしげに、またユーモラスに「わが共和国」と称した。先生は、政治経済だけでなく、歩くフィリピン事典のごとく、何でも知っておられた。知っているだけでなく、文字通り、歩いて体験された。どのような武勇伝があったのか聞き損ねたが、若いころフィリピンの島々を渡り歩きつつ見聞を深めたとおっしゃっていた。研究対象としても、個人的にも本当にこの国が、この国の人が好きだったのだろう。

間もなく、私は野澤先生が主宰する亜細亜大学アジア研究所の研究プロジェクトの末席を汚した。先生が招聘するゲストスピーカーの話は、いずれも興味深く、有益だった。狭い意味でのフィリピン専門家に限らず、多彩なゲストを招いていただいた。映画の話、ボルネオ島の生物資源の話... 楽しかった。次第に、私も公私ともに多忙になり、研究会から遠のいてしまった。少し、後悔している。この野澤プロジェクトの報告書『東南アジアの地域開発』シリーズは、もっともっとよくなる可能性がある（ひそかに）思っている。このような機会をいただき、本当に感謝している。先生は、学部の『国際関係紀要』には、主としてフィリピンの農業開発の論文を、アジア研究所の紀要には、それ以外のテーマの論文を、そしてアジア研究所のニューズレターには時宜にかなったフィリピン情勢分析の論考を精力的に発表された。もちろん、大学以外での研究活動も多彩であった。私は、アジアのセーフティーネット（社会的な弱者保護政策）に関する先生の論文が掲載された書籍をいただき、仰天した。こんなテーマまでカバーしている.....

やがて、私は、学部長になった先生を支える教務主任になった。旅館や大店のだんなさんと番頭の関係だろうか。大学組織だから懸案は常にある。教授会の前日は、議題の整理・確認、学部の先生方への報告事項の確認などをともに行った。これらほとんどの事項については、私を含む若い教員に任せてくれた。しかし、肝腎な所では、ほそっと一言おっしゃる。だから、一

層この一言が効果的になる。大学内の会議でも、寡黙な態度ながら、主張し、益を得る。私のように、ただうるさいだけの人間から見れば、見習う所があった（多かった、と言ったら褒め過ぎになる）。野澤先生の学部長時代（教務主任は私を含めて3人）、英語のEラーニング導入、AUAPサイトとしてのアリゾナ州立大学追加、新学科構想の進展などがあった。学部長のような管理的な職務は、研究者としての野澤先生にとって、意に添わない立場だったかもしれない。しかし、そのことは少しも感じられなかった（今もって、わからない）。頭が下がる思いである。

今後、第5代学部長野澤先生が、「わが共和国」とともに「わが学部」を誇れるよう、われわれ後進も研究、教育、学部運営に尽力したい。先生がご健康を維持しつつ、まだまだアジア研究のために貢献されることを祈念している。野の花に向けてシャッターを切る機会も増えていくのだろう。